

近代ドイツにおける建築の革新派と伝統派によるイデオロギーの分離 -1900年代からのドイツにおける「産業論争」としての「屋根論争」-

氏名 竹本 真

概要

近代ドイツにおいて建築家さらには建築資材業社との間で見られる建築及び景観の「美しさ」に関する対立に着目し、19世紀末から20世紀初頭に発明された耐火茅葺き屋根であるゲルネンツ屋根の保存に関わる様子を近代建築史に位置付けることで、近代建築史に新たな視座を提示することを目的とする。

1. 研究背景と目的

本研究は近代ドイツ建築における建築の革新派と伝統派によるイデオロギーの分離がどのように始まり、何によって突き動かされ展開していくのかを明らかにするとともに、その源流を近代建築史に位置付けることで、近代建築史に新たな視座を提示することを目的とした研究の一環をなすものであり、同研究の端緒をなすものと位置付ける。

筆者はこれまで、1920年代に隆盛を極める近代建築(モダニズム)の重要な形態言語である新建築材料としての「陸屋根(コンクリートによる平らな屋根): Flach Dach」とドイツ民族における固有の文化であり、風土に適するものとしての「勾配屋根」を支持するドイツの伝統派による批判が論争となった「屋根論争」について研究を行い、その過程より建築の近代化について考察してきた。

ところで、図1は1910年11月に行われた「耐火茅葺き屋根」[Gementz Dach](以下、ゲルネンツ屋根と記す)の耐火実験の様子である。一見、ガラスや鉄といった新建築材料が使用される近代建築の流れと逆行するように見えるが、本研究ではこのゲルネンツ屋根に着目する。

先述の「屋根論争」は、主に陸屋根といった新しい形態がドイツにとってふさわしいかどうかといった美的感覚が問われていたのであったが、その端緒は1900年代に既に窺える。それは、田舎の風景の醜悪化を予防すべく、看板広告や碑文、そして街や地域を美的観点より警察管下で管理する

法が施行されたことによるものと推測される。

同法律の審議過程を見ていくと、先ほどの伝統派による国家への請願をはじめとした国家との癒着、そして新建築材料として1900年頃より見られ始める屋根葺きルーフィング[Dach Papp]といった1920年代の「陸屋根」の原型ともいえる緩勾配屋根への防水材の使用を推し進める「産業連盟」[Das Bundes Industriell]や、アスファルトルーフィング業者などによる、先述の美的観点に關した法に対する国家への法改正を求める請願書などが確認できる。

つまり、1900年代には既に「屋根論争」は存在していたと考えられ、それは伝統派による国家への癒着と、美的観点に關した法によって新建築材料の普及が制約された



図1: ゲルネンツ屋根の製造方法 出典:参考文献7に同じ

産業界との仕事の取り扱いといった「産業論争」であることがうかがえる。改めて、先ほどの「耐火茅葺き屋根」に関する資料を見てみると、伝統派が「耐火茅葺き屋根」を高く評価し「産業協会」への反論材

料として支持するなど、先述の仕事の取り扱いの過程が垣間見える。

2. 研究の構成

本稿では、まず郷土保護運動とはどのようなものであったかを示した上で、その中心となるドイツ郷土保護連盟と産業界との論争に着目する。続けて、「産業論争」の際たる事例として耐火茅葺き屋根と陸屋根の議論に着目することとする。

3. 1910年代の「産業論争」について

3. 1. 郷土保護運動と

ドイツにおける生活改善運動は19世紀後半の急激な近代化に対する自然主義の高揚を背景としている。産業革命以降、人口過密、不衛生で劣悪な住環境、疫病の増加、犯罪率の上昇など問題の山積する大都市のありようを敵視する人々が、「自然へ帰れ」を共通の理念とし、農村に人口を還元して産業革命以前にあったとされる社会的調和を取り戻し、自然と結びついた生活を送ることにより、産業の機械化によって低下した人間の価値を回復することを目標とするものであったとされる。具体的には、菜食主義運動、禁酒運動、裸体運動、自然療法、芸術教育運動、土地改革(入植運動)等が挙げられるが、その一つが郷土保護運動であった。

ドイツの郷土保護運動の嚆矢としては、音楽家エルンスト・ルドルフ [Ernst Rudorff, 1844-1916] が知られる。19世紀末に彼が、毎年訪れていた地域の風景が、土地開発によって破壊されていくことに危機感を覚え、彼の論文(1897)の中で郷土保護 [Heimatschutz] という言葉を記した。この論文は小冊子『郷土保護』(1897)¹⁾として出版され、広く知られることとなった。この郷土保護という概念を基本理念として1904年に設立されたドイツ郷土保護連盟 [Deutscher Bund Heimatschutz] はドイツ人建築家パウル・シュルツェ=ナウムブルク [Paul Schultze=Naumburg, 1869-1949] が初代会長となり活動を進めていく。

1904年に設立されたドイツ郷土保護連盟の活動はラウフェンブルク水力発電所工事への反対運動であった。南ドイツのラウフェンブルク付近の急流地域では1904年頃よりライン河を堰き止めて行う工事が計画されていた。同抗議活動はドイツ郷土保護

連盟の最初の任務として大規模化されていくこととなる。

3. 2. ドイツ郷土保護連盟の陸屋根批判

1905年にドイツ郷土保護連盟の公式書籍として出版された小冊子『我が国の醜悪化』²⁾では、郷土の風景損失について以下のように記されている。

「私たちの国の性質と私たちの感情に非常に調和している急な屋根が平らな屋根に置き換えられ、屋根葺きフェルト[Dach pappe]または別の見苦しい代替品は木骨造りの建物に置き換えられなければならない。」^{注1)}

ここで、1905年の時点でドイツ郷土保護連盟が批判している陸屋根とは屋根ふきフェルト [Dach pappe] である。つまり、1905年の時点での陸屋根とは、あくまでも緩勾配屋根を冠した屋根葺きフェルト [Dach pappe] であり、1920年代の屋根論争において使用の是非が問われた陸屋根 [Flache Dach] とは異なるものであった。

3. 3. 産業界からの反対

郷土保護運動を扇動するドイツ郷土保護連盟に対して、反対運動として反対委員会が1909年に設立された。反対委員会の方針は、同年に出版された書籍『危険な美学』³⁾に記されている。書籍の序文にはドイツ郷土保護連盟に対する抗議として以下のように述べられている。

「産業界連盟は、これほど賢い人々の組合が陥るはずのない事態に陥ったのである。一部の政府が、いかなる形態や状況においても、以前のように茅葺き屋根を攻撃しなくなったため、屋根葺きフェルト会社は自社の産業に懸念を抱いている。(中略)貧しい消費者は「危険な美学者」によって圧制されていると嘆いている。何よりも、「大規模で広範な農業は深刻な不利益と出費に陥るだろう」と考えられている。」^{注2)}

ここに、地元の建材を使用し、かつ景観に適応するような村落の建設、そしてそういった建設を推奨するドイツ郷土保護連盟といった組織に対しても批判を行なっていることが読み取られ得る。

4. ゲルネンツ屋根の議論

4. 1. ゲルネンツ屋根について

1900年～1910年の農家の建設と屋根材料をめぐる話題の一つに19世紀末から20世紀初頭にドイツ北部メクレンブルクの農民であるゲルネンツ[詳細不明]によって発明されたゲルネンツ屋根が確認される(1906)⁴⁾。このゲルネンツ屋根はネズミやテンなどの動物が藁葺き屋根に穴を空けにくくするといった害獣対策を目的として発明されたが、同紙では耐火性のある藁葺き屋根として扱われている⁵⁾。作成方法は脱穀した藁を木製パネルに置き、ワイヤーで縫ったのち

に、石膏、水、粘土等の混合水に藁を含浸させたものである。1908年には民間組織によって北ドイツのヴォルプスヴェーデにて耐火試験がなされ、近隣のヴォルプスヴェーデ芸術家コロニー[Kunstlerkolonie Worpswede] (以下、コロニーと記す)の画家ハンス・アム・エンデ[Hans Am Ende: 1864-1918]によって小冊子の報告書として出版された⁶⁾。また、1909年にも民間組織によってドイツ北部ロストックでの耐火試験が行われるが、含浸効果の持続性が不明瞭と消防署に判断されたとされた³⁾。1910年には民間組織によって屋根葺きフェルト[Pappe Dach]との比較によりゲルネンツ屋根の有効性を示すことを目的とした耐火試験が、ドイツ最北端のシュレースヴィヒ・ホルシュタイン州のトンデルンで行われ、小冊子の報告書として出版される⁷⁾。同報告書では1904年にシュルツェ＝ナウムブルクによって設立されたドイツ郷土保護連盟がゲルネンツ屋根をすでに評価しており、火災保険会社らも関心も持ったことが記されている⁴⁾。

4. 2. ゲルネンツ屋根と画家ハンス・アム・エンデ

前掲のハンス・アム・エンデは、19世紀末に画家ハインリヒ・フォーゲラー[Heinrich Vogeler: 1872-1942]を中心とした北ドイツのコロニーに住まう芸術家の一人であった。1903年には生活改善運動としてコロニー内でフォーゲラーを代表とした「ヴォルプスヴェーデ美化協会」[Verschönerungsverein Worpswede]が設立され、造形に富む屋根の建物が建設されたことが知られる⁵⁾。このヴォルプスヴェーデ美化協会に着目すると、ドイツ郷土保護連盟とゲルネンツ屋根との関わりがみられる。

1908年にハンス・アム・エンデはヴォルプスヴェーデでの耐火試験(コロニー外で開催)についての小冊子の報告書『耐火性のある藁葺き屋根: ヴォルプスヴェーデでの耐火試験の手順と屋根の製造説明』(1908)⁸⁾を執筆した(図2)。同書には図版はないものの、試験舎はドイツ郷土保護連盟の支部協会である「ヴォルプスヴェーデ郷土保護協会」[Heimatschutzverein Worpswede]によって作成されたと記され

ている⁶⁾。また、耐火試験の参加者欄には、地元の建築家やニーダー・ザクセン州ハノーファーの火災保険会社の代表者、そしてハンス・アム・エンデとフォーゲラーの名も確認される⁷⁾。フォーゲラーの肩書きを見ると「ヴォルプスヴェーデ美化協会、郷土保護協会の代表」[Vertreter des Verschönerungsvereins Worpswede, Heimatschutzverein]と記されている。

ヴォルプスヴェーデ郷土保護協会の詳細はわからないものの、同書を見る限りフォーゲラーは両組織の代表であり、ヴォルプスヴェーデ美化協会とドイツ郷土保護連盟の結びつきが、ヴォルプスヴェーデでの耐火試験を通じてうかがえる。また、別誌記事⁹⁾では同試験について図版付きで紹介するなかで、図版には「『郷土保護』協会の活動について: ヴォルプスヴェーデの耐火茅葺き屋根の耐火試験」[Von der Tätigkeit des Vereins „Heimatschutz“: Brandprobe eines Feuersicheren Strohdaches in Worpswede]と記されている(図2)。さらに、1909年には使用される屋根材の一つとして唯一ゲルネンツ屋根を規定した設計競技がドイツ北部のブラウンシュヴァイク公国で開催されるが、その結果はドイツ郷土保護連盟の支部協会によって図面集¹⁰⁾として出版されるなど、ドイツ郷土保護連盟に評価されていた。

2-6. ドイツ郷土保護連盟のゲルネンツ屋根の評価

ドイツ郷土保護連盟によるゲルネンツ屋根への評価は1911年の著書¹¹⁾においてもみられる⁸⁾。同書では屋根葺きフェルトやセメントをあくまで代替材料とみる。一方で、ゲルネンツ屋根を景観の美しさをもたらすものとして評価している⁹⁾。ドイツ郷土保護連盟にとってゲルネンツ屋根は耐火性のみならず農家がもたらす景観としても

評価していた。

4. 3. 産業界からのゲルネンツ屋根の反応

1910年11月23日の建築雑誌“DEUTSCHE BAUZEITUNG”¹²⁾には、ゲルネンツ屋根と前述の「ヴェルプスヴェーデの耐火実証試験」(1908)と「ロストック(メクレンブルク)の耐火実証試験」(1909)火災耐火実証試験(1910)を紹介する中で、同記事ではゲルネンツ屋根を以下のように評価している。

「屋根葺きフェルト[Pappe Dach]が長期間の耐火性を証明するとき、屋根葺きフェルトの製造業者[Dachpappen-Fabrikanten]が自己資本を投入して防火試験を行うことが容易であった。ゲルネンツ屋根に好意的な資本家[Kapitalist]は誰もいなかったし、「郷土保護と建物の保存協会」[Vereine für Heimatschutz und Baupflege]がこの運動を取り上げたという事実は、状況をさらに良くするものではなかった。なぜなら、これらの協会は美観上の理由のためだけに屋根を主張していたからである。」^{注10)}

この評価によると、ゲルネンツ屋根に反対する立場である屋根葺きフェルト産業界は自己資本を通して自身の製品の耐火試験を行っていたことが読み取れる。そのため、耐火試験は容易に可能であったとされる。そして、そういった屋根葺きフェルトの耐火試験は資本家によって金銭の援助がなされていたため、ゲルネンツ屋根に対して資本家は反対の立場をとっていたことがうかがえる。

以上のように、ゲルネンツ屋根に反対の立場をとる屋根葺きフェルト産業界は自社製品の耐火性を証明していたことで、ゲルネンツ屋根とゲルネンツ屋根の耐火実証試験を批判したと考えられる。そして、その背景にはゲルネンツ屋根を推進するドイツ郷土保護連盟によって自社製品の売れ行きが低迷してしまうといった危機感による商業的な対立が存在していたと考えられる。

5. まとめ

シュルツェ＝ナウムブルクが牽引する「郷土保護運動」と、資本化を推し進める産業界の中で反対組織が設立されるなど、対立関係が生じて、それ以降、陸屋根及びそれを推進する建築産業界は郷土保護運動への批判を展開していくこととなった。その具体的な事例として、19世紀末から20世紀初頭にドイツ北部で提案されたゲルネンツ屋根は、特にドイツ北部のヴォルプスヴェーデの画家ハンス・アム・エンデによって注目され、さらに郷土保護運動を推進するドイツ郷土保護連盟に注目された。

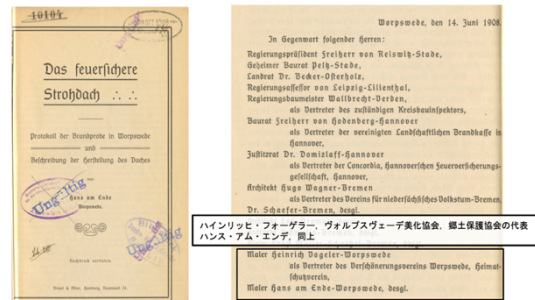


図2 ハンス・アム・エンデによるリーフレット(1908)出典:参考文献6



図3 「『郷土保護』部門の活動について:ヴォルプスヴェーデの耐火茅葺き屋根の耐火試験」(1908)出典:参考文献9

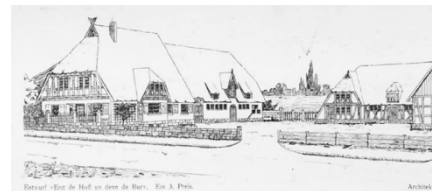


図4 設計競技同率3位作品 ゲルネンツ屋根の作品 出典:参考文献10

そして、ドイツ北部のドイツ郷土保護連盟の州協会や地区協会による講演や設計競技によって、ドイツ郷土保護連盟本部にも伝わることとなった。同時期にドイツ郷土保護連盟は建築家さらには建築資材業社との間で建築及び景観の「美しさ」に関する対立が生じていた中で、ゲルネンツ屋根も対立における一事例として捉えられる。

参考文献

- 1) Ernst Rudorff, “Heimatschutz / Abermals Heimatschutz” Zusammenfassende Darstellung seiner Anschauungen und Forderungen im Grenzboten, 1897
- 2) Paul Schultze-Naumburg, “Die Entstellung unseres Landes”, Gebauer-Schwetschke, 1905
- 3) Heimatschutzbestrebungen, “Gefährliche Aesthetik”, Glashütte . 40. Jg., 1910.
- 4) “Der sächsische Erzähler:Bischofswerdaer Tageblatt ; (Tageblatt für Bischofswerda, Neukirch und Umgebung)” 1906. 3. 22
- 5) 前掲書に同じ
- 6) Hans Am Ende, “Das Feuersichere Strohdach: Protokoll der Brandprobe in Worpswede und Beschreibung der Herstellung des Daches”, Drexel & Adler, 1908
- 7) C.vonVoß, “Das feuersichere Ret-und Strohdach, genannt Gernentz-Dach Mitteilungen des Vereins Baupflege Kreis Tondern” Coleman, 1911
- 8) 参考文献6に同じ
- 9) “Die Woche: Moderne illustrierte Zeitschrift” August Scherl Verlag, Berlin Ausgabe Heft-Nr.30, aus dem Jahr 1908, p.1322
- 10) W.Spehr Regierungs- und Baurat, Braunschweig “Gesammelte Entwürfe aus dem Preisausschreiben für den Bau von Ackerhöfen im Braunschweigischen Bearbeitet auf Veranlassung des Landesvereins für Heimatschutz im Herzogtum Braunschweig” E.Appelbans & Comp. G.m.b.H., Braunschweig (Rud.Stolle & Gust. Roselleb), 1910
- 11) Karl Schmidt, “Zur Aesthetik der Baustoffe Ein Beitrag zur Heimatschutzbewegung” Verband Deutscher Architekten- und Ingenieur-Vereine, 1911
- 12) “DEUTSCHE BAUZEITUNG XLIV. JAHRGANG. NO.94. BERLIN, 23. NOVEMBER 1910” ,p.768

注釈

- 注1) 参考文献2に同じ, pp. 1-2
- 注2) 参考文献3に同じ, pp. 7-9
- 注3) 参考文献7に同じ, p. 4
- 注4) “Zentralblatt der Bauverwaltung. Mai 1909.Nr.43”, pp.293-294
- 注5) ヴォルプスヴェーデ美化協会に関しては, Hans Christian Kirsch, “Worpswede. Die Geschichte einer deutschen Kuenstlerkolonie”, Bertelsmann Verlag, 1995に詳しい
- 注6) 参考文献6に同じ, p. 5
- 注7) 参考文献6に同じ, p. 4
- 注8) 参考文献11に同じ, pp. 7-9
- 注9) 前掲書に同じ
- 注10) 参考文献12に同じ, p. 2